

原著論文

## 源氏物語浮舟論——手習巻の自然描写と伊勢物語——

柴村 抄織 (教育学科)

## 要旨

『源氏物語』五十四帖中、浮舟は、手習巻で出家する。手習巻の自然描写は、浮舟の内面と関連し、『伊勢物語』八十二段と八十三段を受容している。紫式部は、『伊勢物語』の描写によって、聖と俗との境、人物の内面を描写している。

キーワード 源氏物語、浮舟、自然描写、伊勢物語

## 序

「さすらひ」の女君浮舟(以後、「浮舟」は巻名ではなく、登場人物名を指す。)は、薫と匂宮の二人の男性に求められ、身を投げて救出され、出家する。手習巻の救出時、救出後、出家後に浮舟の内面が詳細に描かれる。もはや浮舟にとって、尼君の音楽も艶なる和歌も男女の恋も、人生の意味を持たない。自然を眺めることが、自己の内面と向き合うことになる。俗世の象徴となる尼君の音楽、艶なる和歌、恋などではなく、自然が浮舟の心を惹き付ける。浮舟を取り巻く自然描写について考察を行う。

浮舟の「あはれ」の相対化として原岡文子氏の卓越した御論<sup>①</sup>がある。

中将が、例の気取った言いぶり、道心深げなものの言いの中に懸想

を語る時、彼のもの思いの戯画性は際やかだ。もの思いが、いわゆる「あはれ」な心情として中将自身に受けとめられ、「あはれ」に満ちた表現で描き出されることによって、現実の苦悩の中に漂う浮舟との断絶は浮かび上がる。そのことによって結果として「あはれ」が色を失い相対化されるという構造を、場面は如実に物語っていると言える。

(原岡氏二七九頁)

これまでの源氏物語で、男女の恋は、いかに物語の主題を表現するものとして機能してきたであろう。それを紫式部は、浮舟の心情に集中させている。「源氏をめぐって、或いは薫をめぐって、美しくはかなく展開されてきた恋の道程、その『あはれ』の行為は、中将の場合なんと色褪せてみえることだろうか。色褪せて悲壮な滑稽味をさえ帯びて映るのは、言うまでもなく一方に浮舟の苦しみを担った孤独が対置されているからである。」(原岡氏<sup>②</sup>二八〇頁)のご高説のように、浮舟の孤独が強調され、中将との恋の情趣が戯画化している。

次の手習巻の場面は、恋の始まりに相応しいが、戯画化される。また、中将が訪れても応対しない浮舟に対しての和歌だけを取り出してみると、恋の情趣があるが、戯画化される。

これもいと心細き住まひのつれづれなれど、住みつきたる人々は、ものきよげにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、

女郎花、桔梗など咲きはじめてるに、いろいろの狩衣姿（きんぎょ）の男どもの若きあまたして、君も同じ装束にて、南面に呼び据ゑたれば、うちながめてゐたり。年二十七八のほどにて、ねびととのひ、心地ならぬさまもてつけたり。

(手習巻三〇四—三〇五頁)

【中将】松虫の声をたづねて来つれどもまた萩原の露にまどひぬ

(手習巻三二五頁)

この場面だけを取り出してみると、薫の恋の場面と言われても頷ける。男君も中将という官職で、恋の相手としては申し分ない。自然描写は恋の場面として描かれている。しかしながら、今後、中将から浮舟への侮り、周囲の尼君たちの俗な描写で、中将の恋や周囲の尼君たちは、戯画化される。波線部は、『伊勢物語』八十二段の業平が、惟喬親王と鷹狩りに行く狩衣姿の場面と関連している。後の「三、手習巻と『伊勢物語』」で述べる。

#### 一、手習巻の音楽と艶なる和歌

恋の場面の他に、「音楽をめぐっての『あはれ』なる場面はない。」(原岡氏二八三頁)、「物語の最後の砦を、『あはれ』とみることはもはや不可能だ。歌のやりとり、管絃の遊び、そして男と女との交渉、人と人との思いの交し合いと、その絆、すべては生々しいのちをめぐっての人の世の『あはれ』と言ひ得る。物語は、浮舟を出家に導く、他ならぬその過程に於て、『あはれ』の世界を相対化してしまつたのだ。」(原岡氏二八九頁)と指摘なさっている。

尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ。少将の尼君などいふ人は、琵琶（びば）弾きなどしつづ遊ぶ。【妹尼】「かかるわざはしたまふや。つれづれなるに」など言ふ。昔も、あやしかりける身にて、心のどかにさやうのことすべきほどもなかりしかば、いささかをかし

きさまならずも生ひ出でにけるかなと、かくさだすぎにける人の心をやるめるをりをりにつけては思ひ出づ。なほあさましくものはかなかりけると、我ながら口惜しければ、手習に、  
【浮舟身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけて誰かとどめし思ひの外に心憂ければ、行く末もうしろめたく、疎ましきまで思ひやらる。

(手習巻三〇一—三〇二頁)

尼君らが月を鑑賞しながら、琴を楽しむ中、浮舟は琴の教育を受けてこなかったから、音楽を演奏することもなく、「涙の川のはやき瀬」という独詠歌を手習に書くのである。浮舟のこうした無教育について、永井和子氏の説得力のある御指摘がある。

こうした育ち方をした浮舟は、すべてが素朴で、人間の本能的な力を失わないでいると考えられる。……(中略)……薫のものであるはずの浮舟が、匂宮にひかれたのは、この「無教育」から来る、自然の力のしからしめたものではなかるうか。愛情の面だけで考えれば、「かたしろ」の意識を持つ薫の愛情は本物ではない。それに対し、危険を犯してまで宇治を訪れる匂宮の情熱は、その限りではまさに本物なのである。自己の責任からはじまつた物語である上は、浮舟は何らかの形でそのつぐないをしなければならぬのである。  
(永井氏二八八頁)

浮舟の無教育が人間の本能的な力につながった。ここで、尼君と月を鑑賞しながら、琴を演奏していたならば、俗世に留まっていたであろう。この人間の本能的な力が出家・救済へとつながったのである。浮舟のこれまでの人生が、出家に関わってくる。艶なる和歌についても続けて同様のことが描かれている。

月の明かき夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつ  
つさまさまの物語などするに、答ふべき方もなければ、つくづくと  
うちながめて、

【浮舟】われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに  
(手習巻三〇二—三〇三頁)

月の鑑賞で和歌を詠むのではなく、竹取物語が背景にある孤独感を独  
詠歌に読んでいる。

## 二、手習巻の「雨」と「風の音」

尼君たちの音楽演奏には、心惹かれなかった浮舟だが、「風の音」に  
は、反応している。管絃よりも自然の音である「風の音」に惹き付けら  
れている。手習巻の自然描写の「雨」と「風の音」とが浮舟の心情と深  
く関わっている。雨の描写については、原岡文字氏にご高説(7)がある。

浮舟の物語はこうした重層する「雨」のイメージをさながらに取  
り込むことで、宇治川の力と併せて、超越的な力をもって運命を導  
き、又流し清める水の力を呼び込み、そのことによって贖罪の女君  
の生を深く刻み上げたのではなかったか。それ故にも、季節の情感  
に揺れる「時雨」「春雨」ではなく、より端的にその力を証し立て  
る「雨」の語が選び取られたのでもあった。(原岡氏三六九頁)

「雨」が浮舟物語に有効に働いている。浮舟が僧都に助けられた日の  
「雨いたく降りぬべし。」(手習巻一八四頁)と、蜻蛉巻(二〇二頁)「今  
日は雨降りはべりぬべければ。」浮舟の母である中将の君から浮舟への  
手紙が雨で心配していることと合致している。

他に、中将と妹尼との対面では「むら雨の降り出づるにとどめられて」  
(手習巻三〇六頁)、中将が晴れ間をみているとき、「尼君入りたまへる  
間に、客人、雨のけしきを見わづらひて、少将と言ひし人の声を聞き知

りて、呼び寄せたまへり。」(手習巻三〇七頁)と、供人が「雨もやみぬ  
日も暮れぬべし」(手習巻三〇九頁)と言ひ、時間の経過を表している。  
僧都が明石の中宮に浮舟のことを語るとき、「雨など降りてしめやかな  
る夜」(手習巻三四四頁)とあり、薫が明石の中宮に浮舟のことを語る  
ときに「雨など降りてしめやかなる夜」(手習巻三六二頁)として、まっ  
たく同じ表現が使われ、雨のイメージが使われている。<sup>(8)</sup>

「雨」のみならず、「風の音」の表現についても尾上若菜氏がご指摘さ  
れている。

小野の「風の音」を聞き、降り積もる雪を眺めては、それに付随  
する東国や宇治で過ごした記憶を懐古していく。自然の事物に寄せ  
て記憶を辿り続ける行為によって、現在と過去の往復を繰り返しつ  
つ、いま生きる我が身を位置づけていくのである。(尾上氏二七頁)

「風の音」の描写と浮舟の様子をみでみる。「降り積もる雪」について  
は、『伊勢物語』八十二段との関連で述べる。

昔の山里よりは水の音もなごやかに。造りざまゆるある所の、  
木立おもしろく、前栽などもをかしく、ゆゑを尽くしたり。秋にな  
りゆけば、空のけしきもあはれなるを、門田の稲刈るとて、所につ  
けたるものまねびしつ、若き女どもは、歌うたひ興じあへり。引  
板ひき鳴らす音もをかし。見し東国路のことなども思ひ出でられて。  
かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは今すこし入りて、山に片  
かけたる家なれば、松蔭しげく、風の音もいと心細きに、つれづれ  
に行ひをのみしつ、いつともなくしめやかなり。

(手習巻三〇二頁)

周囲の自然の音やよき自然描写が語られる。若い女たちの稲刈りの歌、

引板の音に過去のことを思い出している。この直後、尼君が皇族の人が弾くことの多い七絃の琴を弾いたり、月を賞でて艶なる和歌を詠んで昔のことを話したりしているときには、「おもしろし」「をかし」「ゆゑを尽くし」「あはれ」などのような肯定的な表現はない。

次の場面は、中将が浮舟を見たときに「風の騒がしかりつる紛れ」と風の表現があり、「世を背きたまへるあたり」として、出家した尼君たちが暮らすところを表現している。

【中将】「かの廊のつま入りつるほど、風の騒がしかりつる紛れに、簾の隙より、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うち垂れ髪の見えつるは、世を背きたまへるあたりに、誰ぞとなん見驚かれつる」とのたまふ。  
(手習巻三〇八頁)

出でたまふとて、畳紙に、

【中将】あだし野の風になびく女郎花われしめ結はん道とほくとも  
(中略)

【尼君返】うつし植ゑて思ひみだれぬ女郎花うき世をそむく草の庵に  
(手習巻三二二頁)

「風」は、他の男になびくこととして詠む中将の和歌に、浮舟に代行して尼君が返歌している。そこには、世を背いた草庵として小野の地を規定している。波線部には、『伊勢物語』八十三段「小野の雪」惟喬親王章段の受容がある。後に、「三、手習巻と『伊勢物語』」で述べる。次は、自然の音である風と横笛の音が対比されている場面である。

【母尼】「いで、その琴の琴弾きたまへ。横笛は、月にはいとをかしまものぞかし。いづら、くそたち(御達)、琴とりてまゐれ」と言ふに、それななりと推しはかりに聞けど、いかなる所に、かかる人、

いかで籠りむたらむ、定めなき世ぞ、これにつけてあはれなる。盤渉調をいとをかしう吹きて、【中将】「いづら。さらば」とのたまふ。むすめ尼君、これもよきほどのすき者にて、【妹尼】「昔聞きはべりしよりも、こよなくおぼえはべるは、山風をのみ聞き馴れはべりにける耳からにや」とて、【妹尼】「いでや、これはひがことになりてはべらむ」と言ひながら弾く。今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくものなれば、なかなかめづらしくあはれに聞こゆ。松風もいとよくもてはやす。吹きあはせたる笛の音に、月もかよひて澄める心地すれば、いよいよめでられて、宵まどひもせず起きるたり。  
(手習巻三一九—三二〇頁)

山風と横笛とが対比され、妹尼の耳には、山風が聞こえてくる日々であったことがわかる。また、母尼が戯画化されてゆく。

耳ほのぼのしく、かたはらなる人に問ひ聞きて、【母尼】「今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、容貌はいとよらにものしたまふめれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋もれてなんものしたまふめ」と、われ賢にうちあざ笑ひて語るを、尼君などはかたはらいたしと思す。これに事みなさめて帰りたまふほど、山おろし吹きて、聞こえ来る笛の音いとをかしう聞こえて、起き明かしたる。  
(手習巻三二二頁)

山おろしが一緒に吹いて、聞こえてくる笛の音も情趣があるとしている。烈しい風との組み合わせになっている庵に住む尼君たちは、楽器の音に加えて自然の「風の音」に聞き入っている。

【少将の尼】「時々はればれしうもてなしておはしませ。あたら御身

を。いみじう沈みてもてなさせたまふこそ口惜しう、玉に瑕あらん心地しはべれ」と言ふ。夕暮の風の音もあはれるに、思ひ出づること多くて、

【浮舟】心には秋の夕をわかねどもながむる袖に露ぞみだるる

(手習巻三二六—三二七頁)

「夕暮」は、『竹取物語』の受容があり、「なほ月出づれば、出て居つ嘆き思へり。夕闇には、ものを思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。」(七〇頁)の夕闇にはもの思いをしていなかったかぐや姫は、月が出ると嘆き悲しむ様子が描かれている。浮舟は、「風の音」とともに夕暮になるともの思いをしている。

みな人々と出でしづまりぬ。夜の風の音に、この人々は、「心細き御住まひもしばしのことぞ。いまいとめでたくなりたまひなんと、頼みきこえつる御身を、かくしなさせたまひて、残り多かる御世の末を、いかにせさせたまはむとするぞ。老い衰へたる人だに、今は限りと思ひはてられて、いと悲しきわざにはべる」

(手習巻三四〇頁)

ひねもすに吹く風の音もいと心細きに

(手習巻三四九頁)

【妹尼】「ただ、かく、おぼつかなき御ありさまを聞こえさせたまふべきなめり。雲の遥かに隔たらぬほどにもはべるめるを、山風吹くとも、またもかならず立ち寄せたまひなかし」

(夢浮橋巻三九四頁)

音楽の演奏にも心惹かれず、艶なる和歌にも惹かれず、独詠歌の手習歌に自己の心情を表出している。他の手段では表出できないとした上で、

小野の「風の音」とともに浮舟の荒涼とした心情風景が描かれている。『紫式部集』には、浮きたる舟があり、不安定な心情が表現されている。

夕立しぬべしとて、空の曇りてひらめくに

かきくもり夕立つ波のあらければ浮きたる舟ぞしづ心なき(一三三頁)

### 三、手習巻と『伊勢物語』

手習巻には、『伊勢物語』八十二段「渚の院」と八十三段「小野の雪」の惟喬親王章段の受容がみられる。

比叡坂本に、小野といふ所にぞ住みたまひける(手習巻二九〇頁)

浮舟のいるところは、惟喬親王が出家隠棲した小野である。「比叡坂本」は、比叡山の京都側からの登り口で、「小野」は、現在の一乗寺北辺から八瀬大原辺一帯を指す。宇治から小野まで約二十五キロメートルである。

狩衣姿の男ども

(手習巻三〇五頁再掲)

小鷹狩のついでにおはしたり。

(手習巻三一四頁)

【妹尼】秋の野の露わけきたる狩衣むぐらしげれる宿にかこつな

(手習巻三一六頁)

『伊勢物語』八十二段でも、鷹狩りのために渚の院にやってきた。妹尼の和歌の「宿にかこつな」は、『伊勢物語』八十二段の業平歌「宿からむ」と紀有常歌「宿かす人」が引かれている。

『伊勢物語』は、八十二段が出家前の君臣和楽、八十三段が出家後の状況が描かれていて、聖と俗の境が明確である。『伊勢物語』八十二段と八十三段をみても。波線部は、手習巻の『伊勢物語』受容部分であ



る。

## 『伊勢物語』八十二段「渚の院」

むかし、惟喬これたかの親王こと申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬みなせといふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭あたまなりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒のみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩うまする交野かたのの家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。馬の頭あたまなりける人のよめる。世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからましとなむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂うれき世よになにか久しかるべきとて、その木のもと立ちてかへるに日暮ひぐりになりぬ。御供なる人、酒をもたせて、野より出で来たり。この酒を飲みてむとて、よき所をもとめて行くに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭あたま、大御酒おほみきまるる。親王のたまひける、「交野かたのを狩りて、天の河のほとりにいたる、を題なづにて、歌よみて盃さかづはさせ」とのたまうければ、かの馬の頭あたまよみて奉りける。

狩うまりくらししたなばたつめに宿しゆくからむ天の河原にわれは来にけり親王、歌をかへすがへす誦よじたまうて、返しえしたまはず。紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿しゆくかす人もあらじとぞ思ふかへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語して、あるじの親王、酔ひて入りたまひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月つきのかくるるか山やまの端はた逃にげて入れずもあら

なむ

親王に代はり奉りて、紀の有常、

おしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も入らじを

(二〇三—二〇五頁)

波線部「狩する」「狩りくらし」は、手習巻の少将が狩りの姿で浮舟を訪れるところに受容がみられる。「憂うれき世」は、手習巻の浮舟の和歌「うき世をそむく草の庵」に出てくる。「月のかくるるか」は、惟喬親王を月に喩えることと、浮舟を月に喩えるところに受容がみられる。惟喬親王が早く休みたいというときに「山の端」がなければ、お休みにならないのに、といって引き留めるところも手習巻に引かれている。「山の端」と「宿」もでてきている。

【妹尼】ふかき夜の月つきをあはれと見ぬ人や山やまの端はたちかき宿しゆくにとまらぬ  
(手習巻三一八頁)

【中将】山やまの端はたに入るまで月つきをながめ見ん閨いの板間いたまもしるしありやと  
(手習巻三一八頁)

「月」は、浮舟に喩えられ、「山の端」と一緒に用いられている。

『伊勢物語』の惟喬親王(八四四—八九七)は、歴史上に実在する人物で、第一皇子でありながら、藤原氏所生の第四皇子(後の清和天皇八五〇—八八〇)に皇位継承を奪われた悲劇の皇子(紀氏所生)である。

## 『伊勢物語』八十三段「小野の雪」

むかし、水無瀬に通ひたまひし惟喬の親王、例の狩りしにおはします供に、馬の頭なる翁仕うまつれり。日ごろ経て、宮にかへりたまうけり。御おくりしてとくいなむと思ふに、大御酒たまひ、禄たまはむとて、つかはさざりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草ひきむすむすぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくにとよみける。時は三月のつごもりなりけり。親王おほとのごもらで明かしたまうてけり。

かくしつつまうで仕うまつりけるを、思ひのほかにも、御ぐしおろしたまうてけり。正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでておがみたてまつるに、つれづれといともの悲しくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひいで聞えけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけどもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとはとてなむ、泣く泣く来にける。 (二〇五—二〇六頁)

「狩り」は、手習巻の中將の狩りに受容がみられ、「枕とて草ひきむすぶ」は、「旅寝」のことであるので、手習巻の「旅寝」に受容されている。後に述べる。惟喬親王が「御ぐしおろしたまうてけり」は、浮舟が出家したことも合っている。『伊勢物語』八十三段の「雪いと高し」は、出家してしまつた惟喬親王と業平の間の状況を表し、聖と俗の境が高く壁のようになっていゝ。「雪」は、手習巻の「雪ふかき」に響き、俗世界とは違ふ聖の世界に住む浮舟の境を象徴している。

浮舟の出家の意識については、切迫感のある浮舟の独詠歌が二首続いている。

【浮舟】「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる

今は、かくて、限りつるぞかし」と書いても、なほ、みづからいとあはれと見たまふ。

【浮舟】限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるか

な (手習巻三四二頁)

『新古今和歌集』には、惟喬親王の和歌が残されているが、源氏物語の手習巻のこの和歌の「世の中を……そむきぬるかな」と、「われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに」(手習巻三〇二頁)、「うき世をそむく草の庵に」(手習巻三三三頁)から作つたかのような心情の一致がみられる。

『新古今和歌集』(巻第十八・雑歌下・一七一八・五一四頁)

世を背きて、小野といふ所に住み侍りけるころ、業平朝臣、雪のいと高う降り積みたるをかき分けてまうで来て、「夢かと思ふ思ひきや」とよみ侍りけるに

惟喬親王

夢かともなにか思はん憂き世をば背かざりけんほどぞ悔しき

『伊勢物語』と手習巻との関連では、他に仙查説話がある。浮舟が出家したときに中將への返歌に浮舟が「うき木」という言葉を用いている。

【中將】聞こえん方なきは、

岸とほく漕ぎはなるらむあま舟にのりおくれじといそがるるか  
な

例ならず取りて見たまふ。ものあはれなるをりに、今は、と思ふもあはれなるものから、いかが思さるらん、いとほかなきもの端に、

【浮舟】心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木をと、例の、手習にしたまへるを包みて奉る。(手習巻三四二頁)

「浮木」は、筏のことであり、勾宮と一緒に小島を見た惑乱の恋が想

起される。都に在る匂宮は、「つとめて、雪のいと高う積もりたるに、文奉りのたまはむと御前に参りたまへる。」(浮舟巻一四八頁)と、最初は都で高く積まれていた雪も、匂宮が宇治に向かう頃には溶けている。「京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままにやや降り埋みたり。常よりもわりなき稀の細道を分けたまふほど、御供の人も泣きぬばかり恐ろしうわづらわしきことをさへ思ふ。」(浮舟巻一四八—一四九頁)宇治では、降り積もっているとしている。ここでは、雪は、都と宇治の境を表現している。この後の浮舟巻の筏に関する場面をみてみる。

いとかなげなるものと、明け暮れ見出す小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橋の小島」と申して、御舟しばしさとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常盤木の影しげれり。【匂宮】「かれ見たまへ。いとかなげけれど。千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、【匂宮】年経ともかはらぬものか橋の小島のさきに契る心は女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、【浮舟】橋の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへしられぬをりかた、人のさまに、をかしくのみ、何ごとにも思しなす。

(浮舟巻一五〇—一五一頁)

匂宮との惑乱の恋である小島の場面では、「小さき舟」に乗って、「遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて」と、現世の此岸からあの世の連れていかれるような感覚が描かれている。そして、浮舟自身を「うき舟」と喩えている。

『伊勢物語』八十二段の舞台、渚の院では、筏に関する漢詩が作られ

ている。平安時代初頭、山崎の離宮で嵯峨天皇が詠作の

『文華秀麗集』 河陽十詠・四首・其二・江上船

一道長江通千里 一道の長江千里に通ひ、

漫漫流水漾行船 漫漫たる流水行船を漾はす。

風帆遠没虚無裡 風帆遠く没る。虚無の裡。

疑は仙查欲上天 疑ふらくは是れ仙查の天に上らんとするかと。

『伊勢物語』の淀川での船遊びの情景が、仙界に通じる筏(水中の浮き木)で天に昇っていく様子を喩える。他に、筏の漢詩がある。

菅原道真作朱雀院での重陽の宴の席上、宇多上皇の命での漢詩である。

『菅家文章』(四四三)

聞昔瀟湘逢故人 聞くならく 昔 瀟湘に故人に逢へりと

在今楽水詎為新 在今 水を樂しむ 詎か新しとせむ

夜魚宿處投心緒 夜の魚 宿る處 心の緒を投ぐ

秋月浮時洗眼塵 秋の月 浮ぶ時 眼の塵を洗ふ

潭菊落粧残色薄 潭(水をたたえるさま。底深いさま。) 菊 粧ひ

を落として 残んの色薄る

岸松告老暮声頻 岸松 老を告げて 暮の声頻りなり

池頭計会仙遊伴 池頭(池のほとり)に計会す 仙遊の伴

皆是乘查到漢浜 皆是れ查に乗じて漢の浜(天の川)に到りなむ

ことを

手習巻にも「故朱雀院の御領にて宇治院といひし所」(二一八〇頁)であり、光源氏の兄の朱雀院はそれまでに崩御している。『大日本史料』によると歴史上の人物の朱雀院(天曆六年崩御)は、宇治に行幸している。手習巻で浮舟が喩えた「浮き木」は、別世界へ行く「筏」であった。浮舟は、現世ではなく、別の世界に行こうとする。さらに、手習巻と『伊勢物語』との関連をみてゆく。



今日は、ひねもずに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、【僧都】「あはれ山伏は、かかる日にぞ音は泣かるなるかし」と言ふを聞きて、我も今は山伏ぞかし。ことわりにとまらぬ涙なりけり、と思ひつつ、端の方に立ち出でて見れば、遥かなる軒端より、狩衣姿色々に立ちまじりて見ゆ。山へ登る人なりとても、こなたの道には、通ふ人もいとたまさかなり。黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみ、まれまれは見ゆるを、例の姿見つけたるは、あいなくめぐづらしきに、この恨みわびし中将なりけり。

かひなきことも言はむとてもしたりけるを、紅葉のいとおもしろく、他の紅に染めましたる色々なれば、入り来るよりぞものあはれなりける。ここに、いと心地よげなる人を見つけたらば、あやしくぞおぼゆべき、など思ひて、【中将】「暇ありて、つれづれなる心地しはべるに、紅葉もいかにと思ひたまへてなむ。なほ、立ち返りて旅寝もしつべき木の下にこそ」とて、見出だしたまへり。尼君、例の、涙もろにて、

【妹尾】木枯らしの吹きにし山のふもとはち隠すべきかげだにぞなき

とのたまへば、

【中将】待つ人もあらじと思ふ山里の梢を見つたなほぞ過ぎうき

(手習卷三四九—三五〇頁)

「木枯らし」という「風」の表現と、「狩衣姿」「旅寝」は、『伊勢物語』八十二段と関連し、「山のふもと」には、『伊勢物語』の出家の世界が描かれている。

すべて朽木などのやうにて、人に見棄てられてやみなむともてなしたまふ。されば、月ごろたゆみなくむすばほれ、ものをのみ思し

たりしも、この本意のことしたまひて後より、すこしはればれしうなりて、尼君とはかなく戯れもしかはし、碁打ちなどしてぞ明かし暮らしたまふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり。こと法文なども、いと多く読みたまふ。雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ、げに思ひやる方なかりける。  
(手習卷三五四頁)

「朽木」は、現世を諦めたことを表す。「雪深く降り積み」は、『伊勢物語』の「雪いと高し」からきている。出家してしまつた惟喬親王と業平の間である、聖と俗の境が高く壁のようになっていいる。惟喬親王の出家については、歴史資料が残っている。

『三代実録』貞観十六年(八七四)九月二十一日の条

惟喬親王が急に出家した二年後、「朕ノ庶兄ノ惟喬親王ハ先皇ノ鍾愛セラルル也」出家している惟喬親王に百戸益封する。(庶兄——母親違いの兄、先皇——文徳天皇薨去)、天安二(八五八)年、清和天皇として即位する。弟が即位して十四年後に急に出家し、益封を辞退する惟喬親王自身の上表文は、「臣往年病を発シ、沈困帰ラス」(臣——君主に対して臣下を表す。)であった。表面上は病による出家遁世であるが、位争いに負けた弟からの援助を断る惟喬親王の矜持がみられる。

浮舟も、表面的には、都で高い地位の薫に引き取られる幸運にありながら、それを拒絶し、出家生活を保持する。

年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬさへ心細くて、「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひはてにたれど、なほそのをりなどのことは忘れず。

【浮舟】かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しきなど、例の、慰めの手習を、行ひの際にはしたまふ。我世になく

て年隔たりぬるを、思ひ出づる人もあらむかしなど、思ひ出づる時  
も多かり。若菜をおろそかなる籠に入れて、人の持て来たりけるを、  
尼君見て、

【妹尼】山里の雪間の若菜つみはやしなほ生ひさきの頼まるるかな  
とて、こなたに奉れたまへりければ、

【浮舟】雪ふかき野辺の若菜も今よりは君がためにぞ年もつむべき  
とあるを、さぞ思すらんとあはれなるにも、【妹尼】「見るかひある  
べき御さまと思はましかば」と、まめやかにうち泣いたまふ。

閨のつま近き紅梅の色も香も変はらぬを、春や昔のと、こと花よ  
りもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや。後  
夜に闕伽奉らせたまふ。下臈の尼のすこし若きがある召し出でて花  
折らずれば、かことがましく散るに、いとど匂ひ来れば、

【浮舟】袖触れし人こそ見えね花の香のそれかとはほふ春のあけぼの

(手習巻三五四—三五六頁)

「春や昔の」の業平歌「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひと  
つはもとの身にして」(『伊勢物語』一三六頁)については、既にご指摘  
がある。薫の歌「袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿や  
ことなる」(早蕨巻三五七頁)があり、「浮舟世界と薫の世界とを繋いで  
いたのであった」。

『伊勢物語』八十三段の業平歌「枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の  
夜とだにたのまれなくに」(季節自体は春)は、手習巻の中將の和歌  
「山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は思ひこそ知れ」(手習巻三  
二八頁)と秋の夜の情趣が同じである。

浮舟の和歌「かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も  
悲しき」の「かきくらす」は、『伊勢物語』六十九段「狩の使い」の業  
平歌「かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ」

(二九二—二九三頁)を引き、浮舟の現実と非現実が不確かな心の闇を  
表す。「野山の雪」は、『伊勢物語』八十三段の「雪いと高し」を示し、  
出家による聖と俗との境を強く意識させる。「雪をながめても」は、「夕  
暮」のときに烈しい「風の音」をきいていた内省の時間を表現している  
のである。よって、浮舟の和歌「かきくらす野山の雪をながめてもふり  
にしことぞ今日も悲しき」は、「現世に生きているかいないのかわから  
ない私が、降りしきる出家後の聖の境で、内省しながら野山の雪をみて  
いる。以前から内省していた日々が今日のこの日も同じ悲しさで思い出  
される」というように解釈できる。

#### 四、浮舟の内省化と自然描写

「風の音」が烈しく、川波の音が荒いときに、浮舟は、人生を考えて  
いる。物の怪の言葉に「この人は、心と世を恨みたまひて」(手習巻二  
九五頁)とあり、自分から(心と)世の中を恨んでいる。

ありし世のこと思ひ出づれど、住みけむ所、誰といひし人とだにたし  
かにはかばかしうもおぼえず。ただ、我は限りとて身を投げし人ぞかし、  
いづくに来にたるにかとせめて思ひ出づれば、いとみじとものを思ひ  
嘆きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげしう、  
川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、来し方行く末もお  
ぼえて、簀子の端に足をさし下ろしながら、行くべき方もまどはれて、  
帰り入らむも中空にて、心強く、この世に亡せなんと思ひたちしを、を  
こがましうて人に見つけられむよりは鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつ  
つづくくとるたりしを、いときよげなる男の寄り来て、いざ、たまへ、  
おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたま  
ふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり、知らぬ所に据ゑおきて、  
この男は消え失せぬと見しを、つひに、かく、本意のこともせずなりぬ  
ると思ひつつ、いみじう泣くと思ひしほどに、その後のことは、絶えて

いかにもいかにもおぼえず

(手習卷二九五—二九七頁)

風と川波によって、孤独感を感じ、人生の行く末を考えている。また、浮舟の身投げ時と発見時の描写が合致している。

【浮舟】「あやしかりしほどにみな忘れたるにやあらむ、ありけんまなどもさらにおぼえはべらず。ただ、ほのかに思ひ出づることとは、ただ、いかでこの世にあらじと思ひつつ、夕暮ごとに端近くてながめしほどに、前近く大きな木のありし下より人の出で来て、率て行く心地なむせし。それよりほかのことは、我ながら、誰ともえ思ひ出でられはべらず」(手習卷一九九頁) 身投げ時

灯点させて、人も寄らぬ背後の方に行きたり。森かと思ゆる木の下を、疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは、何ぞ」と、立ちとまりて、火を明くなして見れば、ものゝあたる姿なり。(手習卷二八一頁) 発見時

浮舟は、烈しい自然の中で、自己の人生を思いつめているうちに「木のありし下」から出てきた人に連れていかれた。浮舟発見時には、やはり森のように生い茂ったくらい木の下で僧の手で火をともしてその姿が見つかっている。見事な場面転換の合致で、場面が形象化される。

「夕暮ごとに端近くてながめし」が、浮舟の内省していた状況であり、不幸な流転の足取りを思い、人生を深慮している。浮舟は、夕暮に自分と向き合っている。このあとの例も「ながめ出だしたまへるさま」がわかる。

姫君は、我は我と思ひ出づる方多くて、ながめ出だしたまへるさまいとつくし。  
(手習卷三〇七頁)

横川の僧都の「このあらむ命は、葉の薄きがごとし」(手習卷三四八頁)も、『白氏文集』巻第四諷諭四「陸園妾」からの引用であるが、「風、蕭瑟たり。」が小野の自然描写と合致している。

小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて、紛るることなく、遣水の蜩ばかりを昔おぼゆる慰めにてながめたまへるに、例の、遙かに見やらるる谷の軒端より、前駆心ことに追ひて、いと多うともしたる火ののどかならぬ光を見ると、尼君たちも端に出でるたり。【尼】「誰がおはするにかあらん。御前などいと多くこそ見ゆれ」、【妹尼】「昼、あなたにひきばし奉れたりつる返り事に、大将殿おはしまして、御饗のことにはかにするを、いとよきをりなりとこそありつれ」、【尼】「大将殿とは、この女二の宮の御夫にやおはしつらむ」など言ふも、いとこの世遠く、田舎びにたりや。まことにさにやあらん、時々、かかる山路分けおはせし時、いとしたりし随身の声も、うちつけにまじりて聞こゆ。月日の過ぎゆくまに、昔のことのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞと心憂ければ、阿弥陀仏に思ひ紛らはして、いとどものも言はであたり。横川に通ふ人のみなん、このわたりには近きたよりなりける。

(夢浮橋卷三二八—三三三頁)

「かかる山路」は、次の「荒ましき山道」と合致している。

【弁の尼】「一日、かの母君の文はべりき。忌違ふとて、ここかしこになんあくがれたまふめる、このころも、あやしき小家に隠るへものしたまふめるも心苦しく、すこし近きほどならましかば、そこにも渡して心やすかるべきを、荒ましき山道に、たはやくもえ思ひ立たでなんととはべりし」と聞こゆ。  
(東屋卷八六頁)

薫が、都から宇治へと通った道が描かれている。『伊勢物語』八十三段の「雪踏み分けて」ともつながっている。

まがふべくもあらず書きあきらめたまへれど、他人は心も得ず。

【妹尼】「この君は、誰にかおはすらん。なほ、いと心憂し。今さへ、かく、あながちに隔てさせたまふ」と責められて、すこし外さまに向きて見たまへば、この子は、今はと世を思ひなりし夕暮にも、いと恋しと思ひし人なりけり。同じ所にて見しほどは、いとさがなく、あやにくにおごりて憎かりしかど、母のいとかなくして、宇治にも時々率ておはせしかば、すこしおよすけしままにかたみに思へりし童心を思ひ出づるにも、夢のやうなり。まづ、母のありさまいと問はまほしく、こと人々の上は、おのづからやうやう聞けど、親のおはすらんやうはほのかにもえ聞かずかしと、なかなかこれを見るにいと悲しくて、ほろほると泣かれぬ。

(夢浮橋巻三八七—三八八頁)

浮舟は、夕暮の自然を眺めながら、自己の人生について内省していた。浮舟をたずねたのは、薫でもなく、匂宮でもない。「今はと世を思ひなりし夕暮」になつかしく思う弟の小君であった。『伊勢物語』八十三段でも、惟喬親王をたずねて業平が帰るのは夕暮である。

#### まとめ

浮舟にとって、尼君の音楽も艶なる和歌も男女の恋も、人生の意味を持たなくなった。「雨」、「風の音」の烈しさ、荒々しさが心を覆い、荒涼とした心象風景になっている。その中で、夕暮に自然を眺めることが、自己の内面と向き合うことになった。

手習巻に狩衣など、狩の描写を入れることで、『伊勢物語』八十二段が想起される。八十二段の業平歌「狩りくらし……宿」や漢詩が歴史上の人物と結びつき、「筏」が、「浮き木」筏」として、手習巻にも浮舟によって詠まれる。

「雨」が浮舟物語に有効に働き、『伊勢物語』の「雪いと高し」の表現効果では、出家前と出家後の聖と俗の境が高く壁のようになっておくとを述べた。浮舟が別世界に行くことに関連して仙查天漢説話について触れた。

浮舟の「浮木」は、「いかだ」筏」のことであり、匂宮と一緒に小島を見た惑乱の恋が想起される。また、朱雀院での重陽の宴の席上、「筏」に関する漢詩が作られる。手習巻にも「故朱雀院の御領にて宇治院といひし所」という説明がなされる。

風と川波によって、孤独感を感じ、人生の行く末を考えている。また、浮舟の身投げのときと発見時の描写が合致し、明石の中宮に会うとき、蜻蛉巻との時間軸の一致から、雨は、場面転換に用いられている。

「夕暮」ごとに端近くながめて」が、浮舟の内省している状況であり、不幸な流転の足取りを思い、人生を深慮している。浮舟は、夕暮に自分と向き合っている。この時間は、小君を想起する時間としても設定されている。

浮舟を取り巻く自然描写は、荒涼とした風景を描写し、出家した人物と俗世の人物の境を表す『伊勢物語』の八十二段、八十三段を用いることで聖と俗の境と断絶性を表現した。浮舟の音楽については、荒涼とした風の音との組み合わせ、東国の思い出との組み合わせ、艶なる和歌には気を留めず、独詠歌の手習歌を詠んでいる。

艶なるもの、これまで情趣深いとされてきたものを超越した浮舟の境地が自然描写とともに表出されている。

注(1) 原岡 文子氏 『あはれ』の世界の相対化と浮舟の物語 『源氏物語』 両義

- の糸——人物・表現をめぐって——』有精堂一九九二年一月二十五日  
 (2) 注(1)に同じ。
- (3) 阿部 秋生氏・秋山 虔氏・今井 源衛氏・鈴木 日出男氏、『新編日本古典文学全集源氏物語六』一九九八年四月一日(東屋巻・蜻蛉巻・手習巻・夢浮橋巻)、『新編日本古典文学全集源氏物語五』(早蕨巻)一九九七年七月十日、小学館、源氏物語の本文の引用は、以後これによる。(論文執筆者により傍線、【 】を付け、振り仮名を振ったところがある。)
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 注(1)に同じ。
- (6) 永井 和子氏『浮舟』『源氏物語講座第四巻 各巻と人物Ⅱ』山岸 徳平氏・岡 一男氏監修 有精堂 一九八九年八月一日(論文執筆者により傍線を付けたところがある。)
- (7) 原岡 文子氏『浮舟』『源氏物語講座第二巻 物語を織りなす人々』編集今井 卓爾氏・鬼束 隆昭氏・後藤 祥子氏・中野 幸一氏 勉誠社 一九九一年九月一日
- (8) 尾上 若菜氏『源氏物語』浮舟物語と天候——雨を中心に——』『国文 一三〇』二〇一八年十二月 お茶の水女子大学国語国文学会 十六—十七頁に「雨」の描写について御論がある。
- (9) 注(8)に同じ。(論文執筆者により傍線を付けたところがある。)
- (10) 注(8)に同じ。この場面について二五頁に御論がある。
- (11) 野口 元大氏『新潮日本古典集成 竹取物語』新潮社 一九七九年五月十日 七十頁(論文執筆者により傍線を付けたところがある。)
- (12) 竹取物語受容については、注(3)の頭注二一、二八にある。二九九頁
- (13) 山本利達氏『新潮日本古典集成 紫式部日記 紫式部集』新潮社 一九八〇年二月十日
- (14) 片桐 洋一氏・福井 貞助氏・高橋 正治氏・清水 好子氏『古典文学全集 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』小学館 一九七二年十二月二十日
- (以後、伊勢物語の本文の引用はこれによる。論文執筆者により傍線を付けたところがある)
- 有常歌は『後撰和歌集』巻第十七・雑三・一二四九・上野峯雄の和歌の改作による増補。
- 月夜に、かれこれして  
 おしなべて峰も平らになりなん山の端なくは月も隠れじ  
 (片桐洋一氏『新日本古典文学大系 後撰和歌集』岩波書店 一九九〇年四月二十日 三七七頁)
- (15) 峯村文人氏『日本古典全集 新古今和歌集』小学館 一九七四年三月二十日
- (16) 山本 登朗氏『伊勢物語の生成と展開』笠間書院 二〇一七年五月三十一日「仙查説話の意味——伊勢物語第八十二段をめぐって」初出二〇〇五年二月 一一〇—一二二頁
- (17) 注(16)に同じ。筏に関する漢詩の御論がある。
- (18) 小島 憲之氏『日本古典文学大系』(第69)懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』岩波書店 一九六四年六月五日 二七七頁、注(15)に御考察がある。
- (19) 川口 久雄氏『日本古典文学大系』(第72)菅家文草・菅家後集』岩波書店 一九六六年十月五日 四五三頁、注(15)に御考察がある。
- (20) 竹田 由花子氏 二〇一八年度中古文学会 秋季大会 「浮舟と伊勢物語の川」二〇一八年十月十一日 七頁(発表要旨)、四一—四四頁(発表資料) 七夕との関連の御考察がある。
- (21) 『大日本史料』東京大学史料編纂所 東京大学出版会、第一編之八(七四四頁)一九三三年六月二十日、第一編之九(一一六頁)一九三五年七月二十四頁
- (22) 黒板 勝美氏『新訂増補国史大系第一部九 日本三代実録後編』国史大系編修會編 吉川弘文館 一九五二年十月五日 三五一頁
- (23) 費 裕子氏『源氏物語』手習巻の読者意識』『中古文学九七巻』中古文学会 二〇一六年六月十五日 六七頁



- ⑭ 鈴木 裕子氏「浮舟の独詠歌——物語世界終焉へ向けて——」『東京女子大  
学 日本文学 第九十五号』 東京女子大学日本文学研究會編 東京女子大  
学日本文学研究會出版 二〇〇一年三月 四六頁
- ⑮ 岡村 繁氏『新釈漢文大系白氏文集一』明治書院 二〇一七年五月二十日  
七三二～七二七頁

(二〇一九年九月一〇日受稿)

---

## Studying the Character of *Ukifune* in The Tale of *Genji*: Description of Nature in the “*Tenarai*” Volume and The Tale of *Ise*

Saori Shibamura  
Department of Education, Kamakura Women's University

### Abstract

Of the 54 volumes of The Tale of *Genji*, *Ukifune* renounces the world in the “*Tenarai*” volume. This paper analyzes the description of nature in the “*Tenarai*” in relation to *Ukifune*'s emotoin. The description of nature in the “*Tenarai*” volume accepts segments 82 and 83 of The Tale of *Ise*. This paper alsor, clarifies how *Murasaki-Shikibu* skillfully depicts *Ukifune*'s psychology and the line between holiness and commonality by means of The Tale of *Ise*.

Key words: The Tale of *Genji*, *Ukifune*, description of nature, The Tale of *Ise*